

— 仏祖の教えを今に伝える —

曹洞禅 グラフ

SÔTÔZEN
Graph

特集

見えない壁だって
超えられる
[前編]

矢田海里

2025 | お盆-夏

173

被災地の 方々から 学ぶ

文= 島 蘭 進

画= 本間 希代子



一

○二四年一月一日の能登半島地震で多大な被害を受け、九月の豪雨でさらにひどい被害を受けた地域が多数あります。壊れた家屋の解体は進んだものの、新たな家を建てるのか、復興住宅に住むのかいう話はあまり聞きません。仮設住宅も落ち着いた暮らしの場にはなりません。

このことは東日本大震災の後の多くの津波被害の被災地の状況と異なる点でしょう。むしろ、東日本大震災に続く福島原発災害の被災地の状況とつながるところがあるようにも思います。被災地から遠い地域の血縁者や知人の家に身を寄せたり、移り住んだりする人が多いのです。

地域外で過ごす時間が長くなった方々は、そのまま移住したり、さらに遠方に生活の場を求めるなどして地域を離れて生きていく道を選ぶこととなります。もともと人口減少の傾向が顕著で、若者が地域を離れていくことが多かった能登半島の多くの地域では、それが甚だしく勢いづいてしまい、地域が急速に寂しくなってしまうことが懸念されます。

それなら新しい産業を起こしたり、観光客を引き寄せればよいということで、今すぐ利益があるような事業に資本を投入して「復興」を

目指すというようなことが起こりがちです。政府や自治体が「創造的復興」ということを唱えているのですが、それは長く地域が培ってきた生活のあり方を軽視して、それらを根こぎにしてしまうようなことになりかねません。

思いやりと感謝の気持ち

二五年三月に私が訪れてお話をうかがった方々は、このような上からの復興計画が住民に押し付けられることを懸念しておられました。七〇歳代から八〇歳代で、今もお元気で生き生きとしたお話をうかがえる方々ですが、失われたはいけない大事なものは地域の住民たちが尊び育ててきたコミュニティのあり方だとおっしゃいます。

ある方は、それは「思いやりと感謝の気持ちだ」と話して下さいました。この地域は、能登半島地震が起こる前から限界集落のトップランナーとよばれていました。そこで、何とか住民が課題を共有することで、地域の維持・発展を実現しようとしてきました。共同事業は住民全員で平等に負担する「総掛かり」というやり方を進めてきました。

廃校になった小学校の建物を使ったり、お寺を用いたりして、さまざまなイベントを行うN

PO法人を立ち上げ、歴史や民俗文化を掘り起こしたり、万燈会を行うなど試みてきました。そうするうちに行政や大学などが協力するようになり、外国人の若者が住み着くようにもなってきたことです。この地域では能登半島地震後、避難先から早い時期に帰宅する人が多かったです。

このような話をうかがうと、能登半島地震の被災地で経験されている復興への歩みは、決して特殊な問題ではなく、日本のさまざまな場所を経験されている課題と重なり合うように思えます。被災地へ赴き、ボランティア活動に携わりながら被災地から学ぶという姿勢が求められているように感じました。



しまの・すすむ

一九四八年生まれ。宗教学者、東京大学大学院名誉教授、上智大学神学部特任教授、同グリーフケア研究所所長。専門は日本宗教学。

ほんま・きよこ

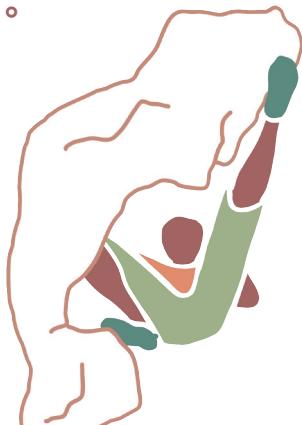
絵描き。岐阜の山村で田舎暮らしをしながら、古楽器奏者の夫・渡辺敏晴と「アトリエ玉手箱」を主宰。二〇一三年に第三回安城市新美南吉絵本大賞を受賞し、絵本『ひとつの火』を出版。

見えないう壁だって、 越えられる

視覚障害を持つクライマーの小林幸一郎さん。
パラ・クライミングの世界選手権4連覇を成し遂げ、2023年に競技生活を引退。
現在はNPO法人・モンキーマジックの代表として全国20か所以上で交流型クライミング・イベントを開催し、
国内外でクライミングの普及に努めています。

取材執筆＝矢田海里

写真：特に表記のないものを除き小林幸一郎さん提供



28歳ころから徐々に視力を失ったあとも、精力的に活動してきた小林さん

前編

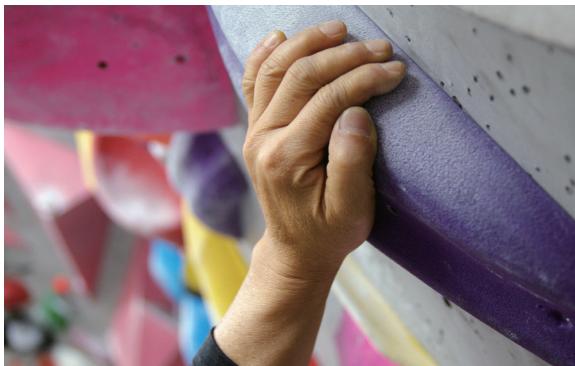


見えない壁だって、
越えられる

ただ始めてみると、思ってもいなかった気が付きがありました。障害のない人たちが参加をしてくれて、非常に大きな価値を感じてくれたんです。具体的には、普段出会わない障害者のことを非常に身近に感じられるようになった、もっと特別な人だと思っていた人たちのことを身近に感じて、普通に声をかけられるようになったとか。だからこうして一緒

▼つづろから活動をされていますか
現在の活動は二〇一二年に高田馬場で始まって、いまでは全国20か所以上でおこなっています。もともとは視覚障害者に向けたクライミング教室をやる団体でした。その活動の中で、参加者の中からクライミングが楽しい、もっとやりたいという声がありました。ただ同時に視覚障害者は、我々のモンキーマジックの教室に参加しないとクライミングができないのかという声もありました。よく考えてみると確かにそうだなと。(視覚障害のない人も含めれば)クライミングをやる人は全国にたくさんいるわけだから、彼らと一緒に登ることができたらいい。視覚障害のある人は目が見えないからできないことがあるだけで、そこを補う情報の提供とマッチングの場所をつくれればいいんじゃないかと思って始めたのが、この高田馬場のマンデーマジックだったんです。

▼ご活動の中で大切にしていることはどんなことでしょうか
クライミングというスポーツを通じて、「多様性の理解ってこういうことなのかな」という気付きがあればいいと思います。最近ではいろんな目隠し体験ができる場所がありますけど、それらとちよっと違うものがコンセプトの柱の部分にあります。まづ目が見えている人が目隠しをして壁を登る体験をすると「大変だ」とか「怖い」みたいな感想が出てきます。ただそれよりも、目が見えない人は見えなのまま、見えにくい人は見えにくいまま、みんなそれぞれがそのまま一緒に楽しむという経験の先にあるものを、ぼくらは「あるべき社会の縮図」という言い方をしていますけど、いろんな人が社会の中にいるのが普通なのではないかなと。例えば白い杖を持っているというと、突然、小林という人間ではなくて、「白い杖を持っている人」ということで終わってしまうということがある。でもそれって交流がなかったり、知らない人だからそうやってしまうだけの話で。交流があるとそういう人たちが特別



都内のクライミングジムでクライミングを教える小林さん
写真：中段、下段のみ筆者撮影

▼現在の活動を教えてください

交流型のクライミング・イベントの開催を通じて、視覚障害のある人も、ない人も、一緒にやってクライミングを楽しんでもらえる活動を行っています。

クライミングが初めてという人も参加しますので、クライミングってこういうルールで遊ぶものですよという基本説明があって、それから視覚障害のクライマーが使用しているHKK(方向、距離、かたちの頭文字をとったもの)の説明があります。あとはグループ分けして、みんなでわいわい一緒に登りましょうというスタイルです。

▼HKKについて教えてください

方向、距離、かたちの略ですね。視覚障害のクライマーは壁を上っていくときに掴まる岩が見えないので、視覚ガイドの人が壁の下から見、岩の方向、距離、かたちを教え上げてあげる。クライマーはその情報を頼りに岩壁を登っていきます。

視覚障害のない人にも、初回からこれを楽しんでもらって実際にガイドしてもらっていきま、すし、目隠しをしてHKKを頼りに壁を上るということも実践してもらっています。



見えない壁だって、
越えられる



ガイドの声を頼りに切り立った岩壁を登っていく

な人ではなくなっていていきます。だからこそクライミングを通じて交流する機会をつくっていきたい。たとえばクライミングの交流イベントが終わってから、学校や職場、地域に戻ったときに、障害者を見かけて、「大丈夫ですか。ちょっとお手伝いしましょうか」と声をかけることが普通になっていって、徐々にできることとできないことが分かっていったりする。そのためにも、一緒にいろんな人と楽しむという経験を持って帰ってもらえたらうれしいかなと思います。

▼クライミングとの出会いを教えてください

私は子どものころ、本当にスポーツとか体育が学校で一番苦手で、勉強も嫌いでした。周りの友だちを見て、何で俺はできないんだろう、友だちはすごいな、格好いいなと思っていましたね。劣等感の塊で、今思えばそんな中で本当に自分を探していたのだと思います。

高校になって、たまたま本屋で立ち読みした雑誌がきっかけでクライミングを知りました。その記事には、クライミングはオリンピックや部活と違って、速い遅い、勝った負けたを競うものじゃない、多くのスポーツと違っ

て、自分の限界を押し上げるものだというようなことが書かれていて。「誰かと比べるものではないんだったら俺にも楽しめるかも」と思って、それがすごく印象的でした。そこに出ていたクライミング教室に申し込みをしたのがきっかけでクライミングを始めることになりました。

当時、人工の壁登りはまだ日本にはなかったのですが、自然の中の岩登りだったんですけど、自分の目標に向かって頑張って登り切ると達成感があった。新しいスポーツの楽しみ方、こういう世界もあるんだと思いました。

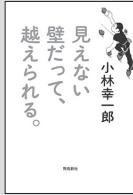
家庭でもない、学校でもない場所で知らない大人たちと岩に登って、キャンプ場に戻って来て、夜は焚火しながらべろべろになるまでお酒を飲んで。大人ってこんなのでいいんだなって。病院の先生、学校の先生、銀行員、サラリーマン、劇団で食べてる人もいて、自分にとっては本当に社会勉強でしたね。

▼目がみえなくなっていたのはいつごろですか

二十八歳ぐらいのときに、車を運転していたらなんとなく前が見えづらいなと思うことがありました。あるとき目の病院に行ったら、「進行性の目の病気で、治療方法はありませ

今回は小林幸一郎著『見えない壁だって、超えられる。』（飛鳥新社）を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画（下記宛先）まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえ、ハガキでご応募ください。

◎2025年8月末必着



171号(冬号)プレゼント当選者

- ①『山上徹也とは何者だったのか』鈴木エイト著（サイン入り）
▶新潟県 石田きよ子様 ▶北海道 日達和則様
- ②『自民党の統一教会汚染追跡 3000日』鈴木エイト著（サイン入り）
▶東京都 大島恒夫様 ▶岩手県 吉田寛一様
- ③『宗教と子ども』毎日新聞取材班著
▶京都府 今川嘉代子様 ▶青森県 西塚務様

読者からのお便り

■『上条陽子とガザの画家たち希望へ…』をいただき、ありがとうございました。上条さんの旺盛な創作活動には圧倒されます。

■『曹洞禅グラフ』No.170・2024 彼岸秋号の正木さんの「ペット供養を考える」を読みました。そのころ我が家にも老猫がいて、ペット供養を考える時期になっていました。メスの黒猫ですが、彼女が幼少期に我が家に来て以来、ペットではなく私たち夫婦の娘か孫のような家族の一員として接してきました。最近老化して、痩せて力も落ちてきましたが、まだ元気でした。ところが、昨年11月1日に突然死亡しました。14歳でした。友人の紹介のセレモニーホールで弔ってもらい、遺骨と位牌を持って帰りました。私は、私が死んだら一緒に墓に入れてほしいと思っています。そして、「あの世」で再会できると思いにしています。



神奈川県 西岡則昌様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

プレゼント・お便り 宛先

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5 仏教企画編集部
Eメールアドレス：fujiki@water.ocn.ne.jp



見えない壁だって、
越えられる

くなるか」ではなくて、「あなたが何をしたいのか、どうやって生きていきたいのか」です。それがあれば、私たちも、周りの人も、社会の仕組みも、あなたのことを支えられるはず。もっと自分の道を自分の足で前に向かって進んだ方がいいです。ということ。言ってくれて、それで後ろ向きだった自分に転機が訪れました。

次号に後編を掲載します。



こばやし・こういちろう
一九六八年東京都生まれ。一六歳でフリークライミングに出会う。二八歳で網膜色素変性症の診断を受け、その後光を失うが、パラクライミングの世界選手権など国内外の多くの大会で優勝し、五五歳で現役引退。選手として活躍していた三七歳の時に、障害者クライミングの普及活動を推し進めるNPO法人モンキーマジックを設立。

やだ・かいり
ライター。著書に『潜匠 遺体引き上げダイバーの見た光景』（柏書房）。

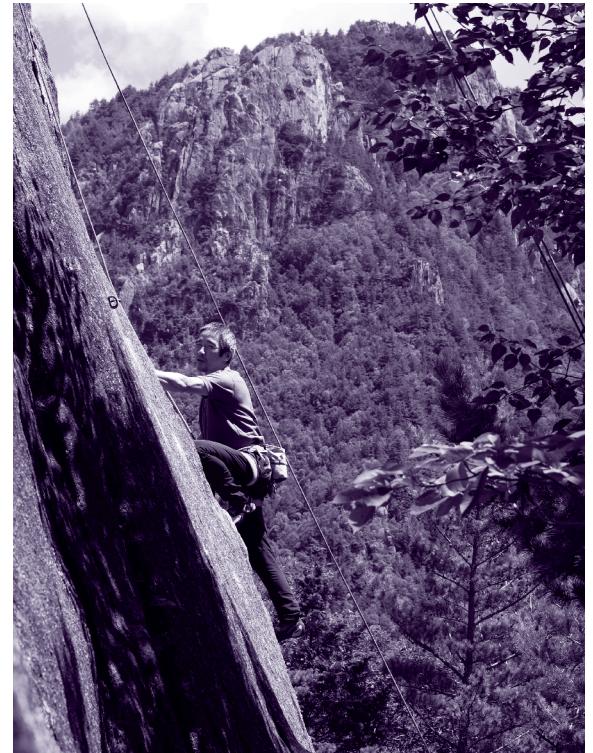
ん。あなたは近い将来、失明します」と突然言われて。その日も自分で車を運転して帰っている。突然何かが変わるといことはなかったのですが、何も知らなければそのままだったはずの日常が、その日を境に大きく変わっていく感じがしました。

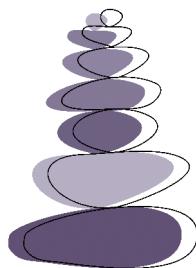
当時はアウトドアの会社に勤めていて、顧客向けにアメリカのアウトドアライフスタイルを体験してもらったりツアーやスクールの運営に携わって、企業人としても本当に充実していたのですが、明るい未来予想図も大きく変わってしまいました。日々生活していく中で、気づけばあれもこれも見にくくなってきていると感じて、見えなくなっていくこ

とへの不安も大きくなっていました。

あんなこともできなくなった、こんなこともできなくなったと、本当に後ろ向きな気持ちで、次は一体何ができなくなるのかばかり考えていました。そんなときに、あるケースワーカーの先生に出会ったことが、ひとつの転機になりました。

失意の中にいた私はその先生に「これから何ができなくなるのですか」というような聞き方をしたんです。すると意外な答えが返ってきました。「いやいや、何ができなくなるのかと言われても、私たちには何も手伝えることはありませんよ。もっと大事なことがあるでしょう」と。大事なことは「何ができな





悲体戒雷震
慈意妙大雲
澍甘露法雨
滅除煩惱燄

悲ひ 体たい 戒かい 雷らい 震しん
慈じ 意い 妙みょう 大だい 雲うん
澍じゅ 甘かん 露ろ 法ほう 雨う
滅めつ 除じょ 煩ぼん 悩のう 燄えん

『法華経』「普門品」より

憐憫ある観音の戒めは雷のように震き
慈しみの心は妙なる大雲のように覆い
真の仏の教えを雨の如くに澍ぎ
煩惱の焔を滅除するのです

〈訳丸山劫外〉

まつやま・けんりゅう
書家（佐藤柯流に師事）。

作品募集

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております
お手本を参考に、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください（無料）。
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に一度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
169（夏号）〜172号（前号）の審査発表は175号（冬号）にて行います。
次回、173号（今号）〜176号の審査発表は179号（冬号）にて行います。
宛先 〒252-0206 神奈川県相模原市緑区城山四-21-5 仏教企画『曹洞禅グラフ』毎日書道募集係宛
締切 2026年5月末日（当日消印有効）

曹洞禅グラフ 募集俳句選

選 尾崎竹詩

「お帰り」と迎へてみたき春の宵

岩手県◎菅原節子

「お帰り」と迎えてみたいのは誰でしょうか。誰か
誰を迎えたいのか書かれていないので想像するしか
ありません。妻が夫を、またはその逆の夫が妻を迎
えたいのかも知れませんが、ではなぜ迎えないので
しょう。それは迎えたくとも叶わないからではない
でしょうか。つまりその人はもうこの世にいないか
らではないでしょうか。春の宵にはそう思わせる不
思議な感覚がするものです。

さざ波の水面に泳ぐ満月か

埼玉県◎西岡備中

水面に映った満月がさざ波で揺らいでいる様子を
「泳ぐ」と表現したのです。大きな波では月が壊れ
てしまいます。波がなければ張り付いているように
しか見えません。微妙なさざ波だから水面の月が泳
いでいるように見えるのです。下五の「満月か」は
リズムがよくないです。この句の場合下五を「望の
月」と言い換えてもいいですね。

せせらぎやしぶきをあびてふきのとう

宮城県◎清水川峰子

せせらぎは浅い川を流れる水の流れ。そのしぶきが
川岸の露の臺を濡らしているのです。まだ枯色の中
にあって一早く露の臺の早緑が顔をのぞかせたので
す。春を待ちかねた喜びが感じられる句です。ぜん
ぶ「ひらがな」で表記することで童心が感じられる
句になりました。

被災地の特産品を歳暮とす

三重県◎杉本敏子

日本は毎年のように激甚災害に見舞われています。
いつ自分の身に降りかかるかわからない災難だから
なんとか被災地に励ましの気持ちを表したい心情が
よく伝わってくる句です。



深呼吸で終わる体操柿若葉

選者詠

おさき・たけし

一九四七年 徳島県阿南市生まれ。
二〇一六年 現代俳句協会理事。
二〇一九〜二〇二四年まで 神奈川県現代俳句協会会長。

作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております
（お一人3作品まで）

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記の
いずれかにてお寄せください。

- ① はがき、封書で投稿
〒252-0116 相模原市緑区城山 4-2-5
仏教企画『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛
- ② Eメールで投稿
fujiki@water.ocn.ne.jp

締切

2025年8月末日（当日消印有効）

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表
する予定です。
- 更に年に1回冬号（新年号）にて年間優秀作品を
選出し、記念品を贈呈します。

日

本仏教では、お盆はもとより、先祖供養が重要な位置を占めてきた。しかし先祖供養などは本来は仏教とは無縁で、習俗あるいは慣習にすぎないという声もある。

確かに仏陀自身は先祖供養とは無縁だったようだ。ところが原始仏典の『雑阿含経』(大正新脩大藏経 第二卷 一七六頁)に、一番弟子の舍利弗が死去したとき、仏陀が彼の遺骨と衣鉢を取り寄せ、手に掲げてその死を悼み、生前の舍利弗の偉業をたたえて偈んだ、と書かれている。ということは、仏陀は死者を供養していた可能性がある。

そして仏陀の入滅後、そう遠くない段階で、仏教団は先祖供養に舵を切ったようだ。では仏教における先祖供養の起源はどこにあったのか。有力な説の一つは三寶階降下だ。死後、初利天に再生した生母の摩耶夫人を供養するために、仏陀が誰にも告げず、雨安居の三か月のあいだ、この天にのぼって母のために説法し、サンカーシャといふところへ降りてきたという伝承で、原始仏典の『増一阿含経』巻二八「聴法品」などに説かれている。

死者を度すべし



「聴法品」三六には、仏陀が「五事」を説いたとも書かれている。「五事」とは、①法輪を転ずべし、②父母を度すべし、③信なき人を信地に立て、④いまだ菩薩の心を発せざる者にして菩薩の意を發せしめ、⑤その中間においてまさに仏の決を受くべし、である。注目すべきは「父母を度すべし」だ。馬鳴(二〇〇年頃)による仏伝として有名な『ブッダ・チャリタ(仏所行讃)』によると、「父

えいでいることを神通力で知った目健連(目連)が、仏陀に母親を救う方法を尋ねたところ救済の方法を授かった……、これが孟蘭盆会の起源だと説かれている。

残念ながらこの説は今では否定されている。近年の学説では、孟蘭盆は古代イラン系の言葉で「死者の靈魂」を意味したウルバンを、漢字の發音で写したと考えられている。イラン系の民族で、シルクロードを舞台に大活躍していたゾロアスター教から、死者の靈魂をまつる祭祀をもちこみ、そこでインドから伝来していた仏教と融合して孟蘭盆会の原型が成立し、『孟蘭盆経』が偽作されたのではないかと、という説が有力だ。実は原始仏典の『サユッタ・ニカーヤ』に、この世にまだ成仏できない亡者がうじゃうじゃいるのを仏陀と目健連が神通力を使って見たという記述があることを考えると、『孟蘭盆経』の説はけっこう上出来なのかもしれない。

ゾロアスター教では男系祖先の靈は天界で子孫の栄枯盛衰を見守っていて、子孫に危機が迫ると地上に降臨し守護靈として子孫を救ってくれるとみなされ、春分の日の直前の五日間には「祖靈祭」が行われた。家中を花で飾り、「ナム・グラハン(人名帳)」と呼ばれる過去帳をとりだし、聖典の文句や呪文を唱えながらご先祖様の名前を読み上げる。天界から現世に呼び出されたご先祖様たちの靈は、それぞれの家庭で楽しく五日間を過ごした後、再び天界へと戻る。この功德で現世の人間たちは今後一年間、ご先祖さまたちの靈によって守護してもらえるとというわけで、この発想は日本のお盆と共通する。

日本では推古天皇の一四年(六〇六)に初めて孟蘭盆会が催された。平安時代になると空海たち留学僧が中国から持ち帰った仏教の施餓鬼の供養とも融合して、重要な年中行事の一つとして定着した。もともと日本列島には何千年も前の縄文時代の頃から、祖先の靈魂を丁寧に祀

お盆の起源を遡ると、仏教の教義のみならず、ゾロアスター教の祖靈祭、さらには縄文時代の信仰にまで至る。死者を敬う心が、時代と地域を超えて結晶した年中行事である。

お盆の起源

文= 正木晃



母を度すべし」は亡き父母に対する「特別の孝養」を意味している。このように各種の文献から推測すると、早ければ紀元前三世紀頃から、いま現に生きている父母はもちろん、すでに亡くなってこの世にはいない父母に対する報恩の行も推奨されていたらしい。民衆の間では先祖供養や追善供養が待望され、仏教教団としてもそれを無碍に否定できなかったと思われる。

さて、肝心のお盆の起源である。お盆は正式には「孟蘭盆会」という。これまで「孟蘭盆」はサンスクリット(梵語)で「逆さ吊り」を意味するウランバナの漢字音写と言われてきた。現に『孟蘭盆経』という経典には、自身の母親が死後、餓鬼道に墮ちて、逆さ吊りの苦しみにあ

先祖と楽しく交流する場



ちなみにお盆といえば、盆踊りが欠かせない。盆踊りは軽薄な娯楽ではない。祖先の靈魂を供養する行為であるとともに、祖先の靈魂と生きている人間が心楽しく交流する場となっているからだ。死者との交流という点、どうしても陰々滅々になりがちなことを思えば、盆踊りの盛り上がりぶりはとても貴重だ。その貴重さを日本人は心の奥底でよくわかっているからこそ、現在でも日本列島の至るところで盆踊りが催されているのだろう。

このとおり、お盆は起源は仏教ではなかったにもかかわらず、日本人の心の中にとっても大切な位置を占めてきた。起源が仏教だったか否かなど、もはやどうでも良い。古今東西の、ありとあらゆる宗教の原点ともいえる「死者と生者の深いかかわり」を、美麗に演出してきたという意味で、日本仏教にとって、お盆は極めて意義深い行事なのである。



まさき・あきら

宗教学者。一九五三年、神奈川県生まれ。国際日本文化研究センター客員助教授を経て、早稲田大学オーブンカレッジ講師。『現代語訳法華経』『ほとけ』論』など多数の著書がある。

日

本は韓国にならび少子化先進国であることは皆さんもご存知であろう。

一九八九年に合計特殊出生率が戦後最低の1.57になったことが「1.57ショック」と呼ばれ、それ以降少子化が問題とされて政府も対策を続けてきた。三十年以上にわたり少子化対策が行われてきているが、二〇二三年の合計特殊出生率は1.20%、二〇二四年の出生数も72万988人と、いずれも過去最低を記録しており、少子化が改善されている様子は見られない。私は少子化の原因の一つに、日本の現代の子育ては親にのみ負担がかかりすぎているという問題があるのではないかと考えている。

国立社会保障・人口問題研究所の調査によると、夫婦の理想の子どもの数と実際の子どもの数は乖離している。同調査によると、理想の子

どもの数まで子どもを産まない理由は、「子育て・教育にお金がかかりすぎる」がトップであり、高齢や不妊という問題を除くと、「肉体的負担が大きいから」が次に多くあげられている。経済的負担の大きさは、教育行政学者の末富芳氏と社会学者の桜井啓太氏の提唱する「子育て罰」という言葉にも表れている。また、子どもの立場から、親の収入・家庭環境や

遺伝的な特性などで子どもの人生が左右されてしまうことを嘆いた「親ガチャ」という言葉も流行したが、これも親にのみ負担・責任がかかっていることを表したものである。さらに、臨床心理士の武田信子氏が提唱した「エデュケーショナル・マルトリートメント」という言葉があるが、これは親が子どもの幸せや成功を願うがために、習いごとや勉強を強要したりすることを指す。子どもの成功は親次第という価値観

文 | 齋藤慈子

日本の子育ての現状と問題

少子化が深刻化する日本。

背景には、子育ての過度な負担が親、特に母親に偏っている現状があります。

本連載では、生物としての視点から子育てを捉え直し、より持続可能な社会のあり方を考えていきます。

を反映した現象ともいえるであろう。

さらに子育ての負担は特に母親に偏りがちである。二〇二二年に施行された「改正育児・介護休業法」の効果により、男性の育児取得率も30.1%と高くなり、休日には母親なしで父親と子どもが一緒に出掛けている様子もよくみられるし、保育園の送りは父親であることも多くなってきたと感じられるが、少し前に社会学者の藤田結子氏の提唱した「ワンオペ育児」という言葉が流行ったように、いまだ平日の家事育児は母親が多くを担っているのが現状である。発達に特性のある子どもの対策について検索すると、いかに母親が頑張るべきかが説かれていることも多い。二〇二二年に『母親になって後悔してる』というイスラエルのオルナ・ドーナト氏の書籍が翻訳・刊行されたところ、日本の反響は大きく、NHKの記者が取材を重ねて書籍『母親になって後悔してる、といえたなら——語りはじめた日本の女性たち』が昨年刊行された。ここでは、「母親だから」という圧力から一人で子育てを頑張ってきた母親の姿が

浮き彫りにされている。

私自身は現在中学生と小学生の男児二人を育てている。地方から東京の大学に周囲からの反対もなく進学することができ、分野にもよるかもしれないが、研究の世界で性別にかかわらず活躍するのが当然という雰囲気の中で生活してきた。妊娠、出産、直接授乳以外、育児も男女平等にできるし、すべきだろうと、出産までは思ってきた。しかし実際に子育てをしてみると、学校や自治体の母親への期待、あるいは自分の内面化された価値観による母親の重圧を日々感じることもあり、そのような問題意識もあって、子育てについて研究をしている。今回は私の考える子育ての現状、問題について説明したが、この連載では、人間も動物の一種であるという視点から、生物としてのヒトの子育てはどのようなものかを考え、親、特に母親に子育ての負担が大きいのしかかっている現状がいかにおかしいか、またそのような現状を改善するにはどうしたらよいかについて私の考えを述べてみたいと思う。



さいとう・あつこ

上智大学総合人間科学部心理学科 准教授。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。養育行動、養育欲求、親子関係、伴侶動物とヒトの関係などをキーワードに、人間の行動・発達を、進化心理学的視点から考える。

伊達氏の城下町として栄えた宮城県仙台市。多くの寺院が集められた寺町で静かに迎えてくれたのは、正保二年（一六四五年）の創建とされる古刹、洞林寺です。洞林寺の先代住職・吉田道彦さんは、昭和三二年（一九五七年）、遠くブラジルに渡り、布教活動に力を尽くしました。



今の佛心寺

道彦さんがパラナ州ローランジャ市で開山した佛心寺は、今も多くの方の心の拠りどころです。日本とほぼ同じサイズのパラナ州をたったひとりで担当していた道彦さんは、言語や文化の壁を乗り越えて、十四年もの間、異国の地で仏の教えを説き続けました。後年には、パラナ州初の仏教寺院建立を功績とし、同市より道彦さんの名を冠する公園と記念碑が開設されています。

道彦さんとは、一体どんな和尚さんだったのか。妻のふく子さんにお聞きしました。

ブラジルでの開山から六十余年



吉田道彦和尚を支えた妻 ふく子さんを訪ねて



洞林寺敷地内にブラジルの国花「イペー」の黄色い花が開いた。写真左から2番目がふく子さん

私

がブラジルに行ったのは、昭和三十八年でした。道彦さんはすでにローランジャ市で七年活動し、佛心寺も建設された後のことです。

結婚が決まった経緯を思い返してみると、聖和学園で学んでいたことと繋がっています。私は学生時代から指人形や紙芝居を作り、子ども

たちにうた遊びを教える活動をしていました。みんなの前で元気を挨拶をしている私を見ていた先生方は、お嫁さんを探していた道彦さんにぴったりだと思ったようです。

ある日、校長先生に呼ばれて行くと、道彦さんと結婚してブラジルに行ったらどうかという話を持ち出されました。

感謝でいっぱい。ブラジルでの七年間

私の父は刑務官でしたが、もともと臨済宗の僧侶として修行を積み、退職後に師家分上のお寺の住職を任されたような人です。その父が「洞林寺の息子さんなら立派な方だ」と背中を押ししてくれました。道彦さんの幼馴染や、聖和学園の後輩でもある妹さんなど、共通の友人たちも結婚を応援してくれました。ブラジルにいる道彦さんとのやり取りは文通でしたね。女学生は花嫁修行として裁縫を習う時代。肌襦袢や単の着物が縫えるように、と先生たちも特別に授業をしてくれました。

あの頃ブラジルに行くためには、約四〇日間の船の旅です。確か十二月に日本を発ち、太平洋からパナマ運河を通り、リオに寄りました。運河を抜ける時にはガタン、ガタンとものすごく揺れるんです。単身渡航の予定でしたが、道彦さんが迎えに来てくれました。後から聞いた話では、船に乗っている間に私の気が変わってしまったら大変だから、とブラジルの曹洞宗総監部の方々が迎えに行くことを勧めたそうです。おかげで、日本で結婚式を挙げる事ができました。

見送りの皆さんには現地での苦勞を心配されましたが、できることならずっとブラジルに住んでいたかった。今でもまた行ける機会があるならもちろん行きます。こんな体験をさせてもらった人はそういないでしょうし、本当にありがたいことだと感謝しています。

心に根付き、次世代へ繋がる禅の価値観

私だけでなく道彦さんも、児童教育への関心が高い人でした。梅檀高校時代から子どもたちのために日曜学校を開き、駒澤大学では児童教育部。卒業後、大本山永平寺での修行時代にも



佛心寺（ローランジャ市）の前にて、道彦さん（前列中央）とふく子さん（左隣）、観音講の皆さん

ましたが、私は全然嫌じゃなかったんです。日本を離れて、道彦さんと暮らしていくことが楽しい体験をたくさんさせてもらいました。初めてローランジャに到着した時は、歓迎の意味として豚や鶏を絞めて、大変なご馳走で出迎えてくれました。あの光景は今も忘れられません。

当然いろいろなことはありましたが、少し行って帰ってきただけの経験ではなく、約二〇〇名の檀家さんたちと人生を共にした日々。道彦さんが慕われているおかげで、私もとっても良くしていただいたんです。七年後、洞林寺に戻るため二人の子どもたちと共に家族で帰国本山の許可を取り、同志の方々と「永平寺日曜学校」を始めました。永平寺の門前で、子どもたちに絵嚙しなどをしていました。

ローランジャの佛心寺でも、日系の子どもの教材は自分たちで手作りし、私も「鳩ぽっぽ」の振り付けを考えたり、「チイチイパッパ」の歌を歌ったり、学生時代にしていたことがとても活かされました。

道彦さんは、パラナ州にある日系移民の入植地を一人で巡回布教していましたので、一ヶ月の半分は不在になってしまいましたが、観音講の皆さんに支えてもらいながらお寺を護ってい



今も多様な世代が集う佛心寺（前列中央：森岡慈春住職）



佛心寺のフェスタでは盆踊りも

ブラジルでの開山から六十余年
吉田道彦和尚と支えた妻
ふく子さんを訪ねて



洞林寺（宮城県）の現任職・吉田俊英老師と檀家の皆さん



ブラジルの開山から六十余年
吉田道彦和尚を支えた妻
あぐ子さんを訪ねて

てて盆踊りをしたり、道彦さんも一緒にお芝居をしたり、大人たちもすごく楽しみにしてくれていました。

帰国後もさまざまなご縁で八回ほどブラジルを訪ねていますが、当時小さなお子さんだったみんなと再会できることは、本当にありがたく胸が熱くなります。現在、佛心寺の住職であり、国際布教師の森岡慈春師は、ローランジャ市で生まれ育った日系二世。小さい頃、佛心寺に来ていた一人です。連邦大学の教授職を退職後、佛心寺の坐禅会に参加したことをきっかけに得度され、宗立専門道場で修行されました。以前お会いした時、「子ども時代に道彦先生から聞いたお話が心の根底にあります」と教えてくれました。道彦さんと一緒にしていた活動が、今も多くの方々のなかで息づいていることは、とても嬉ばしく感慨深いです。きっと道彦さんも「よくやった」と褒めてくれるんじゃないかな。今も毎日のように写真に話しかけているんですよ。

彼の地の経験がつながる現在地

道彦さんが亡くなったのは、五十三歳の時でした。私は四十七歳、日本に帰国してから十四年後のことです。

肝臓癌で亡くなりましたので、お酒が好きだったもんね、と言われることもあります。確かに好きでしたし、他の原因もあるかもしれませんが、ブラジルから帰国後も忙しい日々が続き、心労が多かったのは確かです。優しくて親しみやすく人の話をよく聞こうと努める人でしたので、お話しやすいように、お酒がそばにあることも多かったと思います。お話しも上手で、

難しい言葉を使わずに話してくれるので、いろんな人に好かれていました。私も彼の優しいところを好きになったんです。

道彦さんの他界後、洞林寺が住職不在となった四年間は、私が代務者を務めました。今の住職が来て助けてもらいましたが、お寺に住職がないというのは大変なことです。何もないブラジルで経験したいろんなことを思い出しながら、そして檀家さんたちのことを一番に思い、なんとか乗り越えることができました。八十代になった今、人生に無駄な経験は何もないと思っています。長生きは修行だと言う人がいますが、確かに生きる上で辛いこともありますが、その経験は必ず誰かの役に立つでしょう。長生きしたおかげでわかること、見えてくるものはたくさんあります。いつも誰かのために忙しくしていた道彦さんに教わったことを忘れずに、私なりにできることをここで続けていきます。



曹洞宗 錦柳山 洞林寺
〒984-0051 宮城県仙台市若林区新寺五丁目 4-28
Tel: 022-256-3406
Web: <https://www.dorinji.com>

やなぎさわ・まどか
ライター、編集、翻訳マネジメント。食と農と社会の課題をテーマに執筆する。株式会社 TWO DOORS 代表。



被災地の方々から学ぶ 01
島蘭進

特集

見えない壁だって、
超えられる [前編] 03
矢田海里

毎日書道 11
松山妍流

募集俳句選 12
尾崎竹詩

お盆の起源 13
正木晃

動物との比較から学ぶ、
子育ての処方箋——01
日本の子育ての現状と問題 15
齋藤慈子

ブラジルでの開山から六十余年
吉田道彦和尚を支えた妻
ふく子さんを訪ねて 17
やなぎさわまどか

表紙画「花火」 平川恒太

今回の表紙は、夏、みんなが大好きな花火を描きました。
もともと花火は、疫病などで亡くなった人の慰霊を願ってあげたのがきっかけとされています。そのことから、迎え火や送り火などのように魂や霊を供養するため、お盆前後によく見られます。私が小学生時代にお盆を過ごした高知の祖母の家の近所の花火大会も毎年、お盆に行われます。2年前に久しぶりに見ることができました。今回の表紙の花火の絵は、その時の花火をモチーフに描きました。田舎の小さな花火大会ですが、僕にとって一番愛する花火です。



心が回復する 禅問答

書店、
ネット書店にて
お求めください

島津清彦 著

株式会社シマーズ代表取締役社長
曹洞宗僧侶

禅問答形式で、
本当の自分に出会える

ある一人の青年とわたし(禅僧)との
対話形式で綴られた
本来の自分に出会うための問答。
ビジネス、教育、医療、介護、スポーツ……。
さまざまな分野の人々に役立つ
元上場企業社長による「気づき」の書。



プレジデント社
2022年/四六判/304頁
定価1760円(税込)

島津清彦 (しまづ・きよひこ)

株式会社シマーズ代表。元上場企業社長を経て出家。経営と禅を融合させたコンサルや研修を行う禅僧。著書多数。

季刊 曹洞禅グラフ 2025年 夏号(通巻173号)

令和7年6月1日 発行

発行人 藤木隆宣

編集人 塚越雅之

発行所 有限会社 仏教企画

〒252-0116 相模原市緑区城山 4-2-5

電話 042-703-8641 Eメール fujiki@water.ocn.ne.jp

デザイン 土屋光 (Perfect Vacuum)

印刷所 大盛印刷株式会社

定価 本体200円 + 税